

第三四回 光華講座

発掘『歎異抄』

渡辺 郁夫

はじめに

初めまして。ただ今、過分なご紹介をいただきました。渡辺と申します。今日はお時間をいただけるということで、私の考えていることを一部お話させていただきました。今、ご紹介いただきましたように、こちらの方で丁寧な私の紹介のプリントを作っていました。今、事前に送っていただいて、これでいいかという打診を受けました。私はホームページを開いてまして、その中の一部が紹介プリントに引用されています。いろんなことをホームページに書いているんですが、よくその中からこの部分を見付けて下さったなあと思って、大変、感激感心した次第です。ここに書いてありますように、また今、荒牧先生が紹介してくださいましたよう

に、私自身の歩みを振り返る上で原爆というものはどうしても避けて通れないところがあります。決してこれを大きく前面に取り出して言おうと思っただけではないんですけれども、年齢がだんだん進んでまいりまして、私ももう五十という人生も半ばどころか大分過ぎてしましまして、また私の親の世代がだいぶ年を取ってまいりました。

広 島

私は広島に生まれ、広島に育ち、大学、大学院と長らく東京にいましたけれども、帰ってきて、二十代の終わりから広島で教員をしております。もう二十数年、広島で教員をしております。広島におりますと、学校の教員には平和教育というものがあるんですね。二十数年前、平和教育をやっていた時の環境と今とは相当違います。うちの学校ではクラブのことを班と言いますが、私は放送班、普通の学校だと放送部の指導をやってまして、もうじきコンテストが近くなるものですから、その準備をしたとこなんですけれども、ある生徒が、広島にある大久野島という島のことを、コンテストの放送原稿に書きました。京都の方はご存じでしょうか。これは毒ガスを作っていた島ということで、戦争中は地図から消されていたという島です。よく平和教育では、地図にない島とか、地図になかった島という言い方をするんですけれども、もちろん海岸からは目の前に見えるんですが、戦争中は軍事機密ということで地図から消されていた島です。ここで毒ガスを作っていた。今そこには毒ガス資料館というものがあって、一方で、今

ここは国民休暇村にもなっています、観光でも売っているところなんです。そういう二面性を持つている島なわけです。こういったことも私が教員になってまもなくの頃は、広島での原爆ということと、それから大久野島での毒ガスを合わせて取り上げ、毒ガスというのは被害の側ではなくて、どちらかと言うと被害の側になってくるんですけれども、こういった両面で教えていく時にですね、実際に体験された方に来て話をしてもらおうということがだいたい通例だったんです。原爆に関しては被爆者の方、それから、大久野島で働いておられたという方は、広島県の東部を中心に結構おられたんですね。戦後長らく呼吸器障害を持っておられて、そういった訴訟ともあります。広島にいるとそういうことがしょっちゅう話題になっていたんですけれども、だんだん証言をされる方そのものが高齢化されていきました、本当に世代交代が進んでいったなあと思っています。

一方でこの真宗の方も、ほとんど私にとっては、原爆との関わりと、真宗との関わりというのは切っても切れないくらい深いものなんです。この被爆の証言とか、戦争のいろいろな証言をされる方が、だんだん、だんだん、世の中の第一線から退かれて、少なくなってくるのと期を一緒にするように、真宗の方の「ご安心」というものも変化の波を受けているように感じます。今紹介していただきましたように、広島は安芸門徒と呼ばれ、特に西本願寺の一つの拠点といってもいい地域だったんじゃないかなと思うんですけれども、そこでも、例えば法座を開くとなかなか人が集まりにくいというのが実態になってきております。そういうのもあって私のような人間にも声がかかってですね、変わったことをしゃべってみろという感じがあるのかもしれない。ご住

職の方々とお話する機会があるんですけども、二十一世紀になったところから、ですから戦後五十年、あるいは六十年過ぎたところで、伝統的なこの浄土真宗の世界も非常に大きな波といいますか、必ずしも歓迎できない波が押し寄せてるんじゃないかということ言われています。私はそういうものを何とかして少しでも打開できればという気持ちがありまして、いろいろ話をさせていただいているわけです。

【歎異抄】

前置きが長くなりましたけれども、今日は「発掘『歎異抄』』という題でお話させていただきます。今日入り口の方にあつたと思うんですが、私の新刊書、この二月に出させていただけんですけども、そこから題を取らせていただきました。「発掘歎異抄』』という題で本を書きました。この元になりましたのが、『歎異抄を読む』という本です。これは京都の出版社からもう十一年くらい前になりますけれども、出させていただきました。私としては従来、真宗の捉え方とは、いろんな違う面を入れたつもりです。私は真宗の勉強をさせてもらった者ではありませんけれども、寺の出身ではなく、一在家の人間です。また大学の方も先ほど紹介していただきましたように、龍谷大学とか大谷大学のような宗門大学ではないところで勉強させてもらった者ですので、多少、伝統的な言い方を外れたところでも許してもらえかなあということもありません。自分なりに考えたことをいろいろ書かせてもらいました。一つは、何とかして現代の人々

に、信心、信仰というものを本当に自分の問題として考えていたかという、それがとても大きな気持ちで、それを前面にして書いたものです。それを書いたものだから、あるところから月刊誌に連載をしないかというお話をいただきました。それをずっと連載してありました。それは八十六回まで続いて、取り敢えずは連載としては終了しました。連載が終了したのは、その雑誌がちょっと形態を変えた時ですけれども、同時に私は自分のホームページの方にその記事を連載しました。月遅れぐらいの感じで載せておりましたので、その方で連載を続けて、今回まとめさせてもらったということです。『発掘歎異抄』という題名を付けましたのは、連載の元になっているのが『歎異抄』であるということです。発掘ということなんですが、これはそこに埋もれているものを掘り出してみたいという気持ちがあるわけです。よくご存じのように親鸞聖人の七五〇回大遠忌というのは大変な数字で、まもなく迎えようとしておりますけれども、もう七百、八百年前に亡くなられた方の言葉を現代人に響くようにしていくには、どのようにしていったらいいのか。それは信心ということに尽きるわけですけれども、特にこの信心ということと同時に語られていく真実というものは、これは時代を経ようが、国を変えようが、全然変わることがないはずのものだろうと思うんですね。私なりにそれを感じ取っているものがありますので、それをなんとか伝えていきたいと思っています。そういう気持ちで書かせていただいたものです。

資料の方に、『発掘歎異抄』のモデルになったものを書いているんですが、例えば親鸞聖人の和文である「末灯抄」とかの消息類、いわゆるお手紙、こういうものもありますし、それから蓮如上人の「御文」、西本願寺では「御文章」と言っておりますけれども、書簡形式の読み物とい

うものもありますし、そういうところにある精神というものを生かせないかと思っている部分はかなりあります。また、併せてそこに真宗の初期の伝道においては、非常に大きな力を持ったものとして考えられているものに「名号本尊」というものがあります。今日お聞きしましたら、この奥には立派な十字名号の本尊があるんだとお聞きしました。今、広島で「本願寺展」という、西本願寺の方の展覧会なんですけれども、これをやっておりまして私も見に行きました。昨年秋には、九州の方で、福岡に太宰府天満宮のすぐ近くですけれども、九州国立博物館というのが新しくできましたので、そこを会場にして「本願寺展」がありました。もう時間的に近い所で二回ほど私は見たわけなんですけれども、そこでも名号本尊がありました。またこの親鸞聖人のお手紙とか、蓮如聖人の「御文」とかというものも出されております。手紙というのはもちろん今では活字で読むことができるわけですから、何度も拝読させてもらってるんですけれども、名号本尊というものには、改めて感じるところがあります。私はこの名号本尊に表されたものという精神はまさに真実というものの、親鸞聖人が伝えようとなされたものを非常によく表していると思っっているんです。どういう点でそれが非常に優れていると感じるかといいますと、名号本尊ができる前は、当然、木の仏像とか、金属製の仏像とか、あるいは絵像ですね、こういったものが礼拝の対象だったんだらうと思うんですけれども、親鸞聖人がこの名号本尊という形で表そうとされたものの中には、いわゆる宗教一般で言っている偶像崇拜の否定という意味、これがとても大きい精神としてあるんじゃないかと思うんです。というのは、私の目で見ますと、先ほど、現代において宗教というものが力を失って、信仰とか信心というものに心を寄せる方が広島でも少

なくなつたんじゃないかという話をしましたけれども、その背景というものを考えてみますと、一つは日本が大変豊かな国になって、物質的な繁栄ですね、不況とかなんとか言いますけれども、おそらく日本の歴史を通して言うならば、大変に豊かな時代というものを今我々は生きておるわけです。そういうこの物質的なものの繁栄の中にあつて、ほとんどの人間というのが、いわゆる、私の目から見るとですけれども、偶像崇拜というものに陥つていっているのではないかと見えるんです。それは宗教に関心のある人間が偶像崇拜に陥つていっているのではなくて、まさに物質文明の中で、それを拠り所にして、物というものを、あるいは金銭というものを、そういったものを何よりも大切なものとして生きている人間の有り様そのものが、私には、偶像、真宗の信仰に照らして言うならば、真実ではない、仮のもの、偶像は元々は人形のような、でくの坊のようなものを指すわけですけども、キリスト教で言うならば神ではないもの、そういったものを拝んで生きている。自分ではそれを宗教だと思わないでしょうし、宗教とは全然関係ないと思つていんだらうと思つんです。ところが現代人の心の中を覗いてみると、私は実質的には偶像崇拜に陥つていると感じるんです。それが現代の日本の姿です。かつて日本は仏教国と言つていい時代があつたのかもしれない。あるいは元々の宗教が神の国ということで、神道というものがありませんから、そういうものを生んだ国なんでしょう。しかし、明治以降の近代化の中で、特に戦後、これは教育の影響もあるでしょうし、いろんなものが影響しているんだらうと思つても、物質文明の繁栄というものの中で、ものを拝む、金を拝む…お金を拝むと書いて、拝金主義なんて言葉が使われることもありましたが、そういう状態に多くの人間が陥つてきたんじ

やないかと思うんです。ですから、実質的には形を変えた宗教ならぬ宗教。キリスト教なんかでよく否定してきた偶像崇拜というものが日本人の心の中を占めてきたんではないかなと思うんですね。そういうものはもちろんこの世を去る時に何らあてになるものではありませんから、とても真実と言えるようなものではないんです。親鸞聖人のこの名号本尊の中には、そういった偶像崇拜の否定といったものの精神が、仏教ではそんなに偶像崇拜ということを問題にはしないんですけれども、その偶像崇拜の否定の精神がいち早く表されていて、そのことが親鸞聖人というものが何を伝えようとされた方なのかというのを、とても私はよく表しているように思います。六字名号だけではなくて、九字名号、十字名号といった、ああいったものも、お念仏ということ、一つの言葉として、呪文なのではなくて、本願念仏の精神というものがあつたということ、を前面に打ち出されていた、非常に良い例なんじゃないかと、私としては思っているわけです。是非、現代の人々に、この親鸞聖人の名号本尊に現れているような精神というものをもう一度くみ取ってもらいたいという気持ちがあるわけです。

この精神は、名号本尊だけでなく、親鸞聖人の書かれたものいたるところに現れていると思うんですが、近代において、特に親鸞聖人の表そうとされた精神というものをよく体现されたものとして読まれてきたのが、皆さんよくご存じのように「歎異抄」というものであつたわけです。これは実質的に本当に読まれ始めたのは、二十世紀になってからと言つていいんじゃないかと思えます。奥書のところに蓮如上人の言葉がありまして、「無宿善の機にこれを見せてはならない」というようなことが書かれております。それによつて「歎異抄」は禁断の書であつたんだ

というような言い方をされることもあると思います。一面においてたぶん、それはそうなんだろうと私も思います。「歎異抄」というものの受取り方を間違えてしまうと、確かにこれは危険な面がある。ですから、蓮如上人がそのことを慮られて、禁書扱いにされたというのはある意味よくわかるところがあります。これは現代において「歎異抄」というものを語っていく時に、常に起こる問題だろうと思いますし、心しなければいけないところだろうと思います。しかしそれが二十世紀になって、これは東本願寺の方々のお力というのが相当あるわけですけども、清沢滴之先生とか、暁烏敏さんとか、金子大栄さんとかいった方々がどんどん出していかれて、非常に有名になったという面があると思います。いよいよ、親鸞聖人のこの真実というものを、本当に前面に出して説くべき時代が来たのだと、またそれをしなければいけない時代が来たのだと、そう自身が受け取らせてもらっています。ですから、「歎異抄」という書物は二十世紀になって始まったのであって、そういう意味ではまだ百年くらいの書物ということになります。ちよつと有名になりすぎたという面があると思うんですけども、そこに表された真実というものを、いかに現代が受け取るか、そして、この「歎異抄」というものを現代の書物として、現代の信心、現代の真宗信仰というもの、これを出していきたい、そういう気持ちがあつて、できるだけ新しい話題を取り上げながら書いていくということをしたものが「発掘歎異抄」なんです。

現代における宗教の伝え方

現代において宗教を伝えていくことの難しさというものを、私は日々感じているわけなんですけれども、一体どのようにして皆さんにわかっていただけたのか、あるいは伝えていったらいいのかということを考えるんですけども、その一つに三尊像的な表現ということも思っていますところがあります。この資料のプリントにも書いておられますし、中国新聞の記事の最初に書いているのも三尊像ということなんです。新聞の方で書いている三尊像というのは何かと言いますと、いわゆる阿弥陀三尊というものです。阿弥陀仏を中心に置いて、観音菩薩と勢至菩薩を両脇に置く。この三尊像があるんですが、もちろんそれはそのまま全く構わないわけですが、この三尊像のあり方というものは、私はいろんな意味で示唆を与えてくれているんじゃないかと思うわけです。一つは観音様が表している慈悲というもの、それから勢至菩薩が表している智慧ということ、これを伝えている。これを宗教以外の他のものとの関連で言いますと、芸術的な面と哲学的な面、こういったものを併せていくという形もあるんじゃないかと思えます。特に真宗において大事なのは、私は何かというと、どちらかというと芸術的な表現とか、慈悲とか情緒とか感受性とか、人間のハートの部分ですね、こちらに響いてくるものを出していくということはとても大事なんじゃないかと思ってるんです。そのことと関連して思っているのは、新聞の記事に書いている三尊像の一つのあり方として、親鸞聖人の奥さんである恵信尼と親鸞聖人、これが阿弥陀様

を中心にしてちょうど三尊像的な配置としても考えられる。恵信尼は、六角堂で親鸞聖人が「観音があなたの妻になる」というお告げを受けられて、そして親鸞聖人と結ばれた方ですから、親鸞聖人としては恵信尼が観音菩薩のように思われていて、また恵信尼のほうも「恵信尼消息」に書かれていますけれども、親鸞聖人を夢の中で観音の化身だと告げられたという有名なお話があります。ですから、お互いがお互いを観音様と思われていたわけです。そうすると阿弥陀様を中心にして両方とも観音様という、ちよつとこれは変則的な三尊像になるんですけれども、これは真宗のあり方としてあつてもいいんじゃないかと、私は思ってるんです。その場合、特に女性の持つている観音様のところ、男性の持つている観音様のところ、この両面があつていいと思うんです。

—— 中村久子

実は今回こちらにお邪魔する時に、これは、こちらの真宗文化研究所で出されている「真宗文化」という大変立派な冊子がありまして、これを二年分ほど送っていただきましたので、私も皆様の前で話をさせてもらうにあつて、全部読ませていただきました。その中にですね、たとえば、こちらの方でやられたということなので、その時に来られた方がおられると思うんですけれども、「中村久子の世界展」という展覧会があつたんだそうですね。このことを、こちらの真宗文化研究所が出されている「真宗文化」の方に、こちらの学園の中高部におられる高田正城先生が書かれておられまして、私はそれを読ませていただきました。大変感銘を受けました。せっか

くこちらにお邪魔するので、もしよろしければ高田先生に会わせてくださいということをお願いしました。実はつい先ほどまで、向こうの部屋で一時間半近く、高田先生といろいろお話をさせてもらってました。高田先生が書かれた問題点とかを、私は自分自身に身近なものとして感じているので、それをいろいろお話してたんです。その一つは、女性にとつての仏教ということです。真宗の場合は恵信尼から始まるわけです。真宗の出発点に恵信尼と親鸞聖人の結婚というものがあって、流罪の時点ではおそらく結婚されていたんだろうと思いますけれども、最初から御夫婦という形で念仏の道を説かれていくという形があります。このあり方というのは私はとても大事な視点だとも思っているんです。ですから、女性の方にとつての仏教とか、女性の方にとつての念仏とか、女性の念仏者というのは、私は非常に関心があります。それは私自身の生い立ちで先ほど広島の原因ということを言いましたけれども、私の祖母、これもやはり広島での被爆者ですけれども、大変熱心な念仏者でございました。私の祖母が晩年病気になるまでから、広島に帰るたびに会って、普段は、母方の実家なものですから一緒に住んでいたわけじゃないんですけれども、しょっちゅう行っている話しました。たぶん、私にしか話さなかったんじゃないかなあ、と思われることをいっぱい聞いています。私ならわかってくれると思つたみたいで、自分のいろんなことを祖母は話してくれていました。私の祖母は原爆が落ちる前に夫を病気で亡くしてるんですね。腸チフスだと確か言っていたと思います。伝染病が流行りまして命を落としてしまいました。その後、自分の子どもがまた兵隊に取られる。それから自分の子どもを直接被爆で二人ほど、ほとんど爆心地に近かったんだろうと思われてますけれども、亡くしており

ます。自分の夫が先に亡くなり、男の子を戦争に取られ、それからまた子どもが二人も原爆で亡くなるという、本当に苦しい人生を歩んでいます。それを支えたのが念仏だったと思います。ロボロになったお聖教の本を、亡くなる前に、もう覚えたからいらぬ、と私に言ってくれました。お香の匂いがしみついたその本を、私はとても大事に祖母の形見として持っているんです。この私の祖母の生き方というのはいろんな意味で教えてもらうものがあるんですね。おそらく、広島にはそういった方がいっぱいおられたと思います。あれだけの困難の中をよく念仏一筋で生きてこられたなあ、と思うことがいっぱいあるんですね。最近は特にそういう世代の方がどんどん亡くなられていくので、少しでも資料を集めようと思ひ、いろいろお寺にお邪魔してお話させてもらったりする時に、その仏教婦人会とか仏教壮年会の方が編集されたような被爆体験記とかですね、そういったものがあればもうようにしてるんです。あの方々が経験されたものの中には、真宗の持っている本当の力というものが宿っていたんじゃないかと思ひます。中村久子さんは原爆とはもちろん関係ないわけですけれども、大変な障害をお持ちで、その中で特に「歎異抄」を通してだと言われていますけれども、真宗の信仰に出会われた方で、私はいわゆる妙好人と言つていいと思うんです。そういう意味で大変中村久子さんに注目しております、自分でもですね、お寺とかでお話させてもらつていたんです。そういうことがありましたもので、こちらの高田先生がこれを立派な紀要の論文として書かれたのを読ませていただきました。中村久子さんの取り上げ方というのは、場合によっては、どちらかというと障害者という面に重点を置いて、障害を克服した偉人的な扱いという面で書かれたり、語られることが多いんじゃないかなと

思います。私も中村久子さんのことを初めて知ったのは、これはよく中村久子さんの本を読むと書いてありますけれども、昔テレビで『知ってるつもり』という番組がありまして、あれで取り上げられた時に初めて知ったような次第で、本当はもっと早く知るべきだったんですけれども、その時から関心を持つようになったんです。テレビなんかで取り上げられる時には、真宗の信仰とか念仏者という面は、さほど表には出てなかったんじゃないかなと思います。どちらかという障害を克服して、それから何度も結婚されたり離婚されたり、そして女手一つで子どもを育てられたという、そういう面で語られていたんじゃないかなと思います。実際に中村久子さんも会われたヘレン・ケラーさんと並べて語られることが多いようです。ただ、ヘレン・ケラーさんにしても、全く宗教と無縁だったかという点、全然そうではなくて、あの方はスウェーデン・ボルグという、西洋の方では霊的な世界を説いた人としてよく知られている人ですけれども、彼に始まるキリスト教の一派というのがあるようで、その熱心な信者です。ヘレン・ケラーさんが書かれたスウェーデン・ボルグの宗教の本を私も読んだことがありますけれども、あれを読んで、ああ、ヘレン・ケラーさんを支えていたのはこれだったんだと私は思いました。ああ、彼女は神の心というものを自分の障害の上に表していくという、それを一つの役目として生きたんだなあというのを非常に感じたんです。中村久子さんも、ただ障害ということよりは、できれば、信仰、信心、特に我々にとっては念仏というものを伝えていく、そういう形で取り上げて欲しいなあ、と、私自身よく思うところなんです。ですから、中村久子さんの本当の心の世界、自伝の中で書かれていますけれども、『歎異抄』との出会いによって心を開かれたということ。これに非常

に私は感銘を受けます。

——妙好人

また、中村久子さんに限らず、真宗には長い伝統の中で妙好人という方々がおられます。山口県に六連島という島があります。山口県の西の女界灘といっているいいんじゃないかなと思います。下関の沖合に小さな島ですけれども、非常に古いお寺があり、石山本願寺の戦いにも門徒をあげていったような、そんな所らしいです。島全体が真宗信仰の島という所です。そこに幕末にお軽さんという女性が生まれられました、この方が苦勞の末に信心を得るといってお話があるんです。西本願寺の方で出している『大乘』という雑誌がありまして、去年、二年くらい前まで、このお軽さんのことをずっと連載で出しておりました。中国地方で、私は広島なもんですから、隣の県ということで縁が深いので、私もよく取り上げさせてもらったりするんですけども、こういう女性で信心を得られた方のお話というのは非常に大事なんじゃないかなと思っております。さらに言うならば、これを仏教の文脈の中で語っていきますと、よく言われるのが、女人成仏とか、女人往生という形ですね。元々仏教では、女性というのは成仏できないんだとかいうような考え方もあるんですけども、浄土教や浄土真宗はそうではないよ、女人往生や女人成仏を説く宗教ですよと。四十八願の中には三十五願というのがありますね。これが十八願の別開と言われている、一応、十八願だけで十方の衆生全部入っているわけで、当然女性も入っているわけですから、改めて女性を説かなくても別に構わないんですけども、改めてまた三十五願ということで女

性のことについて説かれている。男女共にみな往生、成仏できる。それは真宗だということを言
うんです。ただ私は、実はちょっと別の考え方を持っていました、確かに仏教の文脈の中では、
そのように元々女性が往生し難いとか、成仏し難いと言われていて、浄土教が特にそこに救い
を開いたという面があるのかもしれないんだけど、本当にそうなんだろうかというのがある
んです。どういうことかと言いますと、元々の日本の宗教から言いますと、日本の古代信仰とい
うものがあつて、いわゆる神道という形で語られているものなんですけれども、そこでの男女の
位置づけというのは現代の位置づけとほとんど逆転といつていいんですね。女性の方がむしろ中
心です。特に他界との関係で言いますと、「母の国」というのがあります。これは私の出した本
に「心の回廊」という本がありまして、これは広島の中国新聞に一年以上にわたって連載したも
のをまとめたものなんです。その中に書いて結構反響をいただいたものなんですけれども、私
が、日本人の他界観を考える上でとても大事に思っているものがあると。それは何かというと、
「母の国」だというのを書いたんです。これは「古事記」とか「日本書紀」を読まれた方は目に
されたことがあるはずです。「母」は正式には「妣」という、女へんに比べるとという字で、ちょ
っと見なれない字ですけども、これは亡くなった母親を表す言葉だそうです。実質的には「ハ
ハ」と読んでいるんですから、「Mother」の母と同じなんです。この「妣の国」というのが他界
のあり方としてよく出てくるんですね。亡くなった自分の母親がいる国ということです。私はそ
れを「母の国」として一般化して言ってもいいと思っています。この「母の国」というのが日本
人の心情の中に、ずっと生き続けていると思ってるんです。その上に、歴史的にみれば後から仏

教が入ってきて、さらにそれから浄土教はいわゆる仏教の中では少し遅れて平安末期くらいから力を持つてくるわけです。そういった信仰が出てくる上で、「母の国」というものが元々日本の中にあつて、それを改めて発掘すると言いますか、取り出すと言いますが、あるいは火をつけるというか、そういう面があつたんじゃないかと思えます。こちらの方ではどうかよく知らないんですが、広島の方に行きますと、お墓に行つて、もちろん真宗のお墓で、「南無阿弥陀仏」の六字名号が彫られているものもよくあるんですけれども、「俱会一処」という、俱に一つのところに会わん、と彫られたお墓がよくあります。これはお経の中の言葉ですけれども、その一つのところというのは言うまでもなくお浄土なんです。私はこの「一つのところに会わん」には、昔から語られてきた「母の国」に行くという気持ち、亡くなった母と同じ国に行くという気持ち、どうも入っているような気がします。ずっとそれは日本人の心情の中に生き続けてたんじゃないかなと思うんですね。先ほど原爆の話をしましたけれども、戦争中に亡くなっていく方々が、よく最期に「お母さん」と言つて亡くなつていったという話を何度か聞いたことがあります。どうして最期に「お母さん」となるんだろうと、不思議な気がしますけれども、やはりそれが自分の最期の拠り所というか、帰るべき所というものが、人間の意識の中にはあるんだろうと思うんですね。ですから我々の浄土信仰の中にもそれと重なるものがあるんじゃないかなと、私としては思つてゐるんです。

話が逸れて申し訳ないんですけども、中村久子さんのお話だつたんですけれども、これ中村久子さんのものを読まれたりした方はよく思われるんじゃないかと思うんですが、中村久子さん

が最後に「悲母観音」というお母さんの観音像を作る、これが果たして真宗の信仰との関係でどうなのかということがあります。まさに高田先生がそのことをちゃんと書かれていたので、これは本当に中村さんの問題をよく考えておられる方だなと思って感心したんです。今日こちらに伺いして、私も私なりに、あれの解決というか、自分の中に答えがあるんだということを言いまして、高田先生のお考えもここに読ませていただいて、どうですかね、という話をさせていただきました。実際、おそらく東本願寺の中でも中村久子さんを取り上げるにあたって、そこがひっかかると思われる僧侶の方とか、宗門の方とかおられるんじゃないかと思えます。普通の真宗信仰だったらあれは出てくるはずがないというのは、確かに考え方ではあると思うんです。だけど、私が思っておって、また今日、高田先生にも申し上げたのは、先ほどから言っている、母の国というのが元々日本人の心の中にならずとあって、私は、中村久子さんはそれを正直に取り出されて語られたんだというふうに思うと。そのことと、この真宗の信仰はなんら矛盾するものではないと思うんだということを申し上げたんです。

——【歎異抄】——

【歎異抄】との関連で言うと、これは実はちよつと難しい話になります。どういう点が難しいかと言いますと、【歎異抄】というのはよく言われますように、異義を批判した書である、もつときつい言い方をすると、異端とか異安心と言われるもの。それが真宗の中で度々そういう問題が起こってくる。そういったものが親鸞聖人が在世中もあつたかもしれないし、また、唯円が生

きていた親鸞聖人が亡くなられて時間的に短い時間、そこでも起こった問題でもあるかもしれませんが。あるいはまた、現代にもずっと繋がっている問題かもしれません。すなわち、純粋な信仰とか信心というものと、それ以外のものの要素というもの、これはどうなのかということ。これは私は昔から考えているところとして、自分の信心を語っていく上で、どうしても避けて通れない問題だと思っています。ちょっとわかりにくい表現になるかもしれませんが。私はこんなふうに思っています。これは中村久子さんの真宗の信仰もたぶんそうだったのではないかと、これは私が勝手に想像してゐるんです。そことの関連で言いますと、ちょっと宗教学語ばかり使わない方がいいかなと思ひまして、一般的に言つて「純粋」と「包容」の關係と言つていいと思います。

今まで純粋な真宗の信心というものと、同時に「摂取不捨」ということを真宗ではよく言ひますね。これは救われたということを表すとても大事なことなんですけれども、この純粋な信仰というものを得ると、「摂取不捨」というものをしみじみと感じる。この「摂取不捨」の精神というものは救い取つて捨てないという、非常に包容性にとんだ、広い心だと思ふんです。この「包容」は抱き取つて捨てないので、「抱擁」と言つてもいいと思います。私はこの純粋性ということとですね、広がり、包容性との間に全く矛盾を感じていない人間なんです。ですから、純粋な信心は同時に摂取である、包容であると思つています。ですからその摂取の中には、こういうと語弊があるかもしれませんが、例えばまだ信心を得ていない人、あるいは他の宗教の人、それも全て含んでいる、そういう広い広い心というものを感ずる。それが「摂取不捨」というものの、非常に重要な真宗の宗教体験の本質にあると私は思つております。純粋性というものと包容

性、また抱き取る抱擁性というものは何ら矛盾するものではなくて、むしろ同時に起こるものである。これは仏教の立場で言いますと、仏教でとても大事にしてるものに、真宗ではあんまり言いませんけれども、「空」というものがあります。「般若心経」なんかはこれを説いた教えとしてとても大事な教えですけれども、浄土教も大乘仏教の中から起こっていますから、「空」とか、あるいは浄土を言うときに、「無生の浄土」、いわゆる普通に生じるのではなくて、そういった、この世に人間が生まれるのと同じではないので、「無生の浄土」という言い方をします。これは曇鸞の教学がそうなんだろうと思うんですけども、「空」というものを中心にしたものがあります。だけど、どちらかというと、大乘仏教では禪なんかで「空」とか「無」ということをよく言うわけですけども、この「空」というものの中に、私は純粹性というものと包容性というものが両方入っているように思うんです。これは私自身の受取り方です。ですから、私自身の立場から言うと、純粹な真宗の信心というものと、そこにあらゆるものが含まれてくるということとは、何ら矛盾を感じないんです。だけど、これが教条主義的と言いますか、真宗というものを一つのイデオロギーのように考えていく方から見ると、大分違ったようにみえてくるかもしれないかもしれません。ですからそういう方からみると、いや、他のものまで取り込んで語っていくということとは、純粹な信仰とは違うんじゃないかと、こう思われる面もあるかもしれないと思うんですね。純粹性を排他性として受け取る捉え方です。確かに自分にとっての真実を求めていく段階ではそれはあると思います。法然上人も他を捨ててこれを選び取るということを言われる。それは本願念仏に行き着くまではそうでしょう。それが、ひとたび救われたら、この純粹性ということと撰

取ということが、一つになって、純粹さいコールそのまま包容性になる、それが阿弥陀様のお心だと私自身は受け取っているんです。そういう観点から私は『発掘歎異抄』というものを書いて、いろんなものを語っています。先ほどから言っている日本の古代信仰のようなことも書いていますし、それからキリスト教のことも書いています。キリスト教の方で言いますと、マリア信仰というのがありますね。聖母マリアに対する信仰です。これなんか、日本人が古代から大事にしてきた、「母の国」というものとかかなり近いものがあるんじゃないかなと思います。特にカトリックの方の教会に、時々観光とかで行く時があるんですけども、非常にマリア信仰というのは盛んですね。御子を抱いた聖母を拝む。御子が聖母に抱き取られています。御子はその摂取の心を救いとして伝える。私はそういう中にも日本の「母の国」と通じる要素があるんじゃないかと思うんですね。親鸞聖人と恵信尼の結婚というのは、まさに、真宗というものには、最初から純粹な信仰というものと、それから母の持つ包容性というものの、実際に恵信尼は何人ものお子さんを持たれていくわけですけども、そういうものが私は出発点として同時にあつたような、非常に包容性にとんだ、しかも純粹な宗教という形で真宗の信心、真実というものがあんだと感じておるわけです。ですから中村さんの晩年のいろんな行動とかに、私は妙好人、あるいは真宗の信仰という立場から特に矛盾は感じないんだということを高田先生にお話して、高田先生は頷いておられました。高田先生は大谷派の僧籍をお持ちだということで、なかなかそう簡単に、そういう問題をイエスとかノーとかを言いにくいお立場だろうと思うんですけども、私は考えていっていいんじゃないかなと思います。改めてこの二十世紀から二十一世紀にかかるところで、

もういっぺん真宗の信心というものを問い直して、この純粹性というものと包容性というもの、それを持った宗教として、真宗を、口はばつたい言い方ですけれども、再生するというか、再創造して、これから千年、二千年と続く世界宗教としてのあり方を作っていきたいと。まあ、ほとんどこれは私の願望というか野望と言ったほうがいいかもしれませんが、そういう気持ちを込めて書いているところがあるんです。話がいろいろ逸れて申し訳ないんですけども。

「悪人正機」について

真宗信仰を語っていく上でどうしても避けて通れない一つの問題として、今、異安心とか、異端という話をしたんですけれども、もう一つ、これは真宗としては全く正当なんですけど、他の宗教から、他の仏教の側からみて、異端、あるいは異端視扱されたものとして、「悪人正機」というものがあります。これはもうほとんど「歎異抄」の核心と言っていると思います。この「悪人正機」というものに対しては、私は大事なものだと思ってます。これはいろんな考えがありますが、一応元は法然上人が言われたということにまず間違いはないだろうと思います。これは梶村昇先生の詳しい論考があつて、私も読ませていただいたことがあります。元々は、浄土宗の資料とっていい『法然上人伝記』の中に、法然上人の弟子であつた源智が、この方は法然上人から「一枚起請文」を書き与えられた方ですが、この源智さんが書かれた物が口伝として残っていたわけです。それが今のいわゆる知恩院の鎮西派の浄土宗としては公認はされないと言います

か、どちらかと言うと善人中心で、悪人は「正機」ではなく「傍機」、こういう言い方をするのですが、善人正機、で、悪人は「傍機」、傍ら。悪人も合わせて救っていくという、これがどちらかという浄土宗の方の基本のあり方のようです。それに対して、真宗は言うまでもなく、『歎異抄』によく現れているように、「悪人正機」ということを前面に出して語ってきたわけですが、これは私は本当に大事な精神だと思っています。これを説いたために、いわゆる聖道門の仏教の方からはこれが邪教である、仏教からみれば異端の教えですね。正当の仏教ではないと、こういう烙印を押されることになったんだろうと思います。しかし、私の考えから言うと、「悪人正機」がなかったら、真宗がこの世界に生まれる意味はないと言ってもいいくらいに思っています。何故なら真宗は救いの宗教だからです。これは聖道門の仏教は、いうまでもなく悟りの仏教ですね。お釈迦様以来。お釈迦様が自ら実践された自分自身の体験を元に言われたわけですから、お釈迦様という完全な実証が、巨大な証拠があるわけですから、お釈迦様の言う修行というのをちゃんとしていれば必ず悟ることができる、この悟りの宗教として仏教は始まったわけです。そこで説かれたのが因果の教えです。縁起の法とか因果の法とか言われるものです。

親鸞浄土教に至るまで

——「因果の法」・「四諦八正道」

まず言うまでもなく、仏教というものは因果の法というものを説くことから始まっているわけです。「善因善果」「悪因悪果」という、善悪がちゃんと業報を受けるといって、これは立派な因果の法です。そして原始仏教においては「四諦八正道」ですね。「苦・集・滅・道」といって。この仏教の出発点にあった四諦は「因」と「果」の関係にあると普通説かれます。「苦」というのが現在の「果」ですね。それをもたらしたものが何かというと「集」、これは集まるという字を書きますけれども、さまざまな業因が集まっている、これが「因」で、これがもとになって現在の「苦」というものがあると。同じように「滅」というのは涅槃で「果」ですね。それをもたらすものが「道」、修道という、道を修めていくという、仏教の修行をすることです。聖道門で言ういわゆる修行です。これを修めることが「因」となって、「滅」という「果」がある。この因果の法に基づいて「四諦八正道」というのが説かれています。「八正道」というのは「道諦」をより詳しく説いた部分で、大乘仏教ではこれが「六波羅蜜」という形で展開されていきますけれども、「八正道」も「六波羅蜜」もいわゆる聖道の修行という意味では同じだろうと思えます。こういう形で仏教の因果が説かれていくわけです。これ自体、私は何ら問題はないと思いま

す。お釈迦様が自らの経験に基づいて話されたわけですから、本当に尊いものだと思います。特にこれは過去世から来世に向かって、過去世、現世、来世と三世の因果という形でいいですけれども、この三世の因果というものが現代においてまともに信じられなくなっていることに対しては、私は大変危機感を感じるものがあります。いわゆる因果ということならば、ある程度納得できるんだけど、それが三世にわたって展開するという、こうなるとなかなかこれがわからないという。まあ、そんなものは信じられないと。せいぜい、因果という言葉で受け入れてもらえるのは、科学の場合の因果律、これも広い意味での因果の一部と言っていいんだろうと思うんですけども、この科学の説く因果律ならわかるんだけど、それを三世の因果という形で展開すると、もうついていけない。結局、何をしようが知ったこっちゃないという感じになって、それが聖者の目か見ていけばとんでもない業を作っていることになるんですけれども、何ら反省もない。三世の因果が今の日本においては、かつてのおそらく日本人の心の中では当然だったんじゃないかと思うんですけども、急速に衰退しているんじゃないかと思えます。現代社会におけるいろんなおぞましいような事件、しょっちゅう起こりますけれども、京都でもありましたね。日本各地でああいうことが起きます。件数そのものがどうなっているのか私はよくわかりませんけれども。また別の言い方ですと、自ら命を絶つというようなことがある。これは犯罪ではないのかもしれませんが、三世の因果ということからみたら、極めて恐ろしいことだろうというように思います。三世の因果というものを信じた人間なら、果たしてそう簡単に自らの命を絶つだろうか。日本における年間の自ら命を絶つ方の数は三万人だそうですね。すごい

数です。広島原爆の被災ということを行いましたけれども、広島原爆の被災というのはあまりに被害が大きすぎて、未だによく実態というのが掴めていないので、何万人なのかはつきりわからないのですが、少ない方の数字だと十万人ぐらい。いろんな数字があります。今、中国の方でも大地震がありまして、刻々と数字が変化しておりますけれども、まだ瓦礫の下におられるんだらうと思います。広島原爆もそうで、家ごと焼けてしまったなんていう話は非常に多いので、本当のところ実態が掴めないらしいです。でもそれが仮に十万人だったとしたら、今の日本の年間の自殺者の数というのは三年くらいでその数になってしまう。だとしたら、広島原爆というのは大変な人類の罪業、罪悪だと思えますけれども、現代の日本で年間三万人も亡くなるんだとしたら、日本人は他国の原爆や核兵器を非難できるのかということですよ。むしろ日本の方が他国から多くの国民を殺していると非難されてもしかたない状況です。だから自殺者の数というものにはとても心を痛めるものがあります。一つは、浄土信仰が廃れたというのもあるのかもしれないけれども、この三世の因果ということが人々の心から消えていくという現象も出てくるのかなあと、いろんな形で世の中に変な歪みが出てくるんじゃないかなあと思うんです。

浄土教

仏教の原点は言うまでもなく聖道門の中心である因果の法で、聖道門というのはこれだけで成り立っていると言っているいい教えですね。そしてこの世で阿羅漢以上の悟りというものを得ること

ができる。他の言い方で言いますと、声聞・縁覚以上の悟りを得ることができるといのが聖道門の教え、最終的にはお釈迦様が実現されたように、この世界で仏になる、成仏するという、聖道門の教えがあるわけです。これ自体に私は何ら異議を差し挟む気持ちはありませんし、むしろ、それをベースにして浄土教というものはあると思います。浄土教がそこで違ってきたのは、この滅諦、道諦というものが、お釈迦様によって説かれ、あるいは「四諦八正道」として、あるいは「六波羅蜜」というものが大乘仏教の展開の中に出てきて、それで人間が本当に救われるのかというその問題ですね。苦を知る、苦諦というのが仏教の大きな出発点ですけども、現在の苦というものを自分というものが感じとる、ああ、これは過去からの迷いの結果として今ここに苦があるんだと感じる。苦諦と集諦、三世の因果の過去から現在までを知る。しかし問題はそこから、道諦の部分です。現在から未来へと向けて、この業の流転する生死輪廻を抜け出していく修行をしていくということは非常に厳しいということですね。これはおそらくともにやった人が感じるんだらうと思います。親鸞聖人の比叡山での九歳から二十九歳までの修行というのはまさにそれだったらうと思いますね。もし親鸞聖人がそこでこの聖道門の修行をされて、悟りを開かれたならば、現在の我々の知っている真宗というものはなかったかもしれない。あるいは法然上人も同じように比叡山を出られたわけですから、法然上人が専修念仏と出会うということがなければ、やっぱり今の我々の浄土の法門というものはなかったかもしれません。しかし、どうということかわかりませんけれども、お二人はいわゆる聖道門の修行という面では、伝統的な因果の法、これを信じて修行をする、これだけではどうにも自分の迷いの世界というも

のを抜けることができないと、これを感じられたわけです。そこに全く発想を別にする、全くと言って同じく因果の法であることは同じなんですけれども、この世界にいる人間、衆生の側から起こしていく修行によって、その因として積み重ねていって起こる果というのではなくて、我々の側から出発するのではなく、浄土の側、如来の側から出発する、もう一つの因果というもの、これを説いてきたのが、私は浄土教だと思います。いわば、出発点が異なる二つの因果ですね。この世の人間、衆生の側から出発して、悟りの世界に向かっていると、此岸から彼岸に向かっていると、因果を説く聖道門、これ自体は私は何ら問題はないと思います。ところが、もう一つ、既に成仏をされた如来の側から本願という形で、我々を救い取るという、その本願を因として、我々に信心というものが恵まれる。本願を因として我々に信心という果がある、このいただいた信心が次に我々が浄土往生する因になる。基本的には因果の法なんですけれども、出発点が違ってくるわけです。人間の側からではなくて如来の側から、いわゆる如来廻向というもので、これが浄土真宗なわけです。この法門が説かれて、それが我々に恵まれているということ。私はこれによって仏教の因果の世界が完結したんだと思うんです。この世の衆生の側からの因果の世界、お釈迦様も衆生の一人として自ら修行なさった。そして仏果を得られたわけです。これは自らの因果の法というものを実証されたわけですね。それをお弟子さんたちに「四諦八正道」という形で因果の法として説かれた。しかし、全ての者がそれで本当に成仏できるか、どうもできない。親鸞聖人や法然上人という方はそれを感じられたわけです。まあ、ひよっとしたらあの方々は、本当は聖道門の修行でも悟りを得ることができたのかもしれませんが、結果

的にはそれは挫折したわけです。しかし、新たな全く観点を別にした、浄土の側、如来様の側、
真実の側から真実を恵むという形での因果というものがあるんだと、親鸞聖人は自ら経験された
んだと思うんです。それがいわゆる絶対他力として我々の側からではない、如来様の側からの浄
土教です。道諦の中味が転換したわけです。ただしこのへんになってきますと、おそらく正確に
言うところの浄土宗、浄土宗の中でもいろんな考え方がありますから、西山派とか鎮西派とかあり
ますから、一概には言えないんですけれども、知恩院あたりの浄土宗とはちよつと考え方が違っ
たかもしれません。私が、大学時代の時にテーマにしたもので、今でも時々考えるし、またこうや
って話をさせてもらうことがあるんですが、「一念・多念」という問題があります。これは初期
の法然教団の中においても出てきた問題だと言われていますけれども、今私が言っているのは真
宗の信心という立場で言っているんですから、極めて一念の側に傾斜した形で言っているわけで
す。本願と出会う、信心というものをいただく、という。そこで我々の往生、成仏というものが
定まるという考え方ですね。これは既に如来の側で成就されたもの、だから、如来様の側に原点
があるわけです、出発点があるわけです。それを廻向という形でいただく。そういうあり方で
す。そうしますと、これは必然と一念という形になっていくんですね。多念に見える部分とはい
うのは、じゃあどうなのかというところ、その一念というものがこの世界で我々において相続してい
く、続いていくという姿です。これは自ずと続いてくるんですね。何故続いてくるかと言うと、
真実の側というのが時間を超えたところにあるので、そこからこの時間の世界に出てくる時に
は、自ずと相続という、続くように見えてくるんですね。それは、外から見ると続いていくよう

に見えて、またものすごくお念仏を重ねて積んでいるように見えるんだけど、私は決してそうではないと思います。そう見えるのは外から見た場合の誤解だと思います。本当に、真実、信心を得た人の念仏というのは続くんです。相続するんです。それは時間を越えたところに原点があるのです、そこから自ずとこちらに展開をしてくるわけですね。人がこちらから重ねるのも功德を積んでいるのでもありません。これが親鸞浄土教の核心部分にあるものであって、既に如来様の側で成就されたものが、人間の側に投影されてくる、反映されてくる、恵まれる。それによって救われる、そういう教えなわけです。「如来廻向」の恵みと救いです。ですから人間の側からこれを重ねていくと考える、いわゆる多念というのは、一念の信心の上に立った念仏相続のことを言っているんじゃないかと、こちらから多念を重ね功德を積んでいくという考え方になるんですけれども、これは結局ほとんど聖道門の因果の、人間の側から善因を重ねていく因果の世界と同じになってしまふんじゃないかと思うんです。つまり自力です。ですから、よく言われるように、一度、浄土門に帰依したように見えながらも、実質的には自力に陥ってしまうということ、これは極めて多く、よくある現象なんじゃないかと思えます。これは自分自身の信心として問いかけていかなければいけないところだろうと思えます。同じように起こるのが、『歎異抄』などでしばしば批判されている賢善精進、賢こぶる、善人ぶる、ということなんです。この賢善ということ、そもそも聖道門の出発点から言うなれば、全くその通りなんです。善を積んで悪いわけはありません。仏教というのは元々「善因善果」なんですから、善を積む宗教です。悪因を積んだらそれは「悪因悪果」なんですから、これは聖道門の因果ですよ。当たり前のお話です。

「善因善果」、「悪因悪果」という聖道門の因果の上に立っていくならば、当然、善を積む。その中で最も優れた善というのが、「八正道」の道諦であり、あるいは「六波羅蜜」という形で説かれていく。布施とか持戒とか忍辱とかですね、こういったものになっていくわけです。これはみんな優れた善です。ですから、それを積み重ねていくならば、それはもう仏果が得られるのは当然だろうと思います。ところが我々の立っている因果の基盤というのが、先ほどから言っていますように、衆生の側から出発していくのではなくて、如来の側からいたかどうかという、如来が出发点になっている。そういうものですね。そうでなければ救われなかったわけですね。聖道門の修行をしてそれが可能になったならば、わざわざ浄土の因果というものを説かれる必要はないわけです。親鸞聖人、法然上人が比叡山で修行されて、それが成就したならば、現代にやはり浄土宗、真宗はないでしょう。だけど、幸か不幸か、あの方々の挫折によって浄土宗、真宗が生まれた。私はそこに一つの人間の考えを超えた大きな計らいというものを感ずるんです。本当は修行が可能だったんだけど、敢えて挫折させられたんじゃないかと。法然、親鸞の比叡山での挫折も、言うならば如来廻向の一つの現れだったんじゃないかと。極論すればですよ、そう思うところがあるんです。あの方々が挫折されて、おかげでそうではない形でのもう一つの因果というもの、それが浄土の因果という形で説かれた。【正信偈】を読みましても、因とか果とか因縁とか、何遍も出てくる言葉ですね。ですから明らかに【正信偈】の世界、【正信偈】は【教行信証】のエッセンスと言っていると思いますけれども、あれが因果の法というものに基づいていることは確かだと思います。私は、【教行信証】の骨格は浄土の因果を説くことにあるんだろう

と思うんですけれども、これによって聖道門によって悟ることのできなかつた人間も、浄土門のもう一つの因果によって救われるという。その浄土の因果が説かれたことで、仏教の因果の世界が、人間の側から出発していく因果と、浄土の如来の側から出発していく因果と、両方説かれることによって、本当の意味での因果の世界が完成したんじゃないかと思えます。ですから、見方によると、聖道門から見ると、浄土門の教えというのは極めて異端的な、仏教の因果の世界を無視した、とんでもない教えであると、「悪人正機」なんてあり得ない、「悪因悪果」なんだから、「悪人正機」なんてあり得ない、普通に考えたら全くその通りだと思えます。しかし、そうではなくて、そういった「善因善果」、「悪因悪果」という因果で自分の出離というものを果たすことができない、それがいわゆる真宗信仰の「機の深信」に当たるわけですが、この聖道門の因果というものを信じることによって、「機の深信」という、決して救われない自分というものの中に思いついた人間にとつて、もう一つの救いの道、これが浄土の因果として説かれている「法の深信」です。私は、こうして浄土教が、本当の意味での仏教というものを完成させたのではないかと思うわけです。

自然法爾

さらに、晩年の親鸞聖人になりますと、これが「教行信証」にはそれほど出てないと思えますが、晩年になっていかれますと、いわゆる「自然法爾」という形で、ほとんど「自然」を説いて

いると言っているんですね。【歎異抄】の中にも「非行非善」がありますし、それから「無義」の教えというのがあります。全部否定形ですけどもね。人間が何かをしていくのではなく、だからもちろん他力ということを表しているわけですが、その他力というのが、最終的には「自然法爾」、「自然」という形で語られているんです。この言葉そのものは、お経の中に何度も何度も、「無量寿経」を読んでも何遍も出てくる言葉ですけども、最終的にはおそらく「自然」というものの中に全ての仏教というものが含まれたんだろうと思います。よく言われますのは、「自然」と言うものは、まず「業道自然」。これは先ほどから言っております、聖道門仏教の基本になっていく聖道門の因果ですね。因果応報の業報の論理です。これによる「自然」、これ自体は人間が作り出したものではなくて、一つのいわば法則としてあるものです。それから「無量寿経」の中に出てくる「自然無為」とか「無為自然」とか、おそらく浄土経典というのは中国で翻訳された時に、道家思想、老荘思想の影響を受けたと思われるので、元はおそらく道家思想の言葉がそのまま転用されたんだろうと思いますけれども、「無為」という言葉もよく出てきますね。これは如来様の悟りの世界をそのまま表す言葉です。この「自然」というものがあって、この如来様の悟りの世界である「自然」、この場合の「自然」は「自ずからしかり」になると思いませんけれども、「真如」という、そのままそうであるという如来様の世界。そして次にこれを元にしての「願力自然」。こうなると阿弥陀様の本願力がそのまま我々に働いてくるということであって、その場合の「自然」というのは「自ずからしかり」というよりは、「自ずからしからしむ」ということで、そういう読み方をよく親鸞聖人がされます。使役形を使った読み方ですね。

これに展開されてくるわけです。だから、如来様の働きとしてみるならば、「無為自然」という「自ずからしかり」、これが「因」としてあるわけです。この如来様の悟りである、「自ずからしかり」という「自然」の世界、これが元にあるわけです。これが「自利」の世界です。「自内証」と言ったらいいと思いますけれども、ご自身の、如来様の悟り。これを「因」として、我々にその同じものの徳を与えようとする、「願力自然」、「自ずからしからしむ」。これが「果」の方になるわけです。この「無為自然」という如来様の「自利」を「因」として、「願力自然」という「利他」の働きである「果」がある。我々に真実を恵んで、我々を真実に生かそうとする、こういう働きが出てくるわけです。この最後の二つですね、これがおそらく親鸞聖人にとって、一番中心の「自然」の世界だったんだらうと思います。ですから、「他力」と言いますけれども、他からの力とも言えますが、「利他力」と言ってもいいわけで、如来様の「自利」を元として我々にそれを恵もうとする、「利他力」という「他力」。これが親鸞聖人の世界なんだらうと思います。ですから、一つの単語としても言うならば、「自然」というものにおいて、最終的な親鸞聖人の浄土教というものは、もうそこに尽きると。結局それを言ってしまうえば、出発点にあった聖道門の因果も全部そこに含まれてしまう。必ずしも否定しているわけではないわけです。これが私が最初に純粹性と包容性ということを言いましたけれども、本当に純粹な信心を突き詰めていくと、自ずと最終的にはそれは全てを包み込んでいくものになってく、極めて包容的な、包容性に富んだ「空」の世界。一念の世界というのは、如来様の世界ですから「空」の世界と言っていいと思うんですけれども、その中に入っていくところに、自ずと包容というものが開ける。純

粹であると同時に全てを包み込んでいる世界。これが阿弥陀様の限りなき命の世界ということな
んだらうと思います。私はだから親鸞聖人の歩みというものをみると、最終的には「自然」とい
う言葉で言うことができると思います。それは同時に、宗教用語を使わずに言いますと、純粹性
でもあり同時に包容性でもある。限りなき包容性、極限の包容性と言ってもいいと思いますけれ
ども、一切を包み込む。私は「摂取不捨」というのは、全てを包み込んでいることなだらうと
思います。これについてはいろんな考えがあるようで、法然教団の初期においても、「念仏衆生
摂取不捨」というのが、絵図になり、私は実物を見たことがないので想像で言っているだけなん
ですが、「摂取不捨曼陀羅」というのがあったそうで、阿弥陀仏の光明というのは、念仏をする
信者だけが受ける。聖道門の人のところへ行くとその光が折れ曲がったような絵があったんだと
いう話がありますね。まだこれは見つからないそうですね。昔から、私が浄土教の勉強をし
始めた頃から「出てきたらすこいだらうな」と言ってますが、未だに発見されませんから、たぶ
ん聖道門側の怒りを買って、焼かれたんだらうと思うんですけど、ひよっとしたら出てくるかも
しれませんね。親鸞聖人のお骨も出てきたとか言って、今、広島の本願寺展で厨子が展示されて
るんですけども、常楽台と言うんですかね。そういう所にあつたとかいう展示が、今、広島で
されていますけれども、突然思いがけないものが出てきますから、あるいはひよっとしたら出て
くるかもしれません。しかしそれは「摂取不捨」の精神ではないと思います。

年にまつわる不思議な話

縁起

話がちょっと逸れますけれども、私、今、多少、教義的なことを話しましたけれども、神秘的なこともよく言っています。これは私の本を読んでいただいたらわかるんですけれども、真宗に起こる不思議な現象として、辛酉の年というのがあるんです。これは親鸞聖人が法然上人のところへ行かれたのが一二〇一年で、これが六十年で一周する辛酉といえます。これ、日本史の勉強をされたり、日本の古代信仰のことを勉強をされた方はご存じじゃないかと思うんですが、日本の歴史は神武天皇の即位が辛酉の年にあつて、そこから始まったとされている非常に大事な年なんです。親鸞聖人が法然上人に会いに行かれたのがまさに一二〇一年で辛酉の年なんです。どうもこれに合わせていろんな不思議なことが起こるんです。本願寺派の方で言いますと、一八〇一年頃というのがありまして、江戸時代末期ですけれども、「三業惑乱」という大事件があるんです。お東の方もいろいろゴタゴタがありました。西本願寺は江戸時代に大きいのを経験してまして、もう宗門の中で納まりがつかないから幕府まで乗り出してきて、逮捕者とか死者も何人も出るといって、大事件があるんですが、この「三業惑乱」に決着を付けた本がありました。これは広島の大藏さんという方が書かれて、私、広島なものですから関心があつて、勉強させても

らったりしたんですけれども、その決着を付けた本というのが、この一八〇一年に京都で出版されるんですね。これも一八〇一年というのは辛酉の年なんです。それから先ほどちょっと話した、六連島のお軽さんに生まれたのもこの年ですし、それから恵信尼の手紙が西本願寺で発見されたというのがあるんですが、これ一九二一年なんですけれども、この年も辛酉の年なんです。一九二一年というのは非常に不思議な年です、辛酉の年でもあるんだけど、聖徳太子が親鸞聖人を導いて法然上人のところへ行けと言ったのが、一二〇一年の辛酉の年です。六角堂の夢告の年ですね。六角堂で、そういう夢告があった。聖徳太子がそういう示現をしたという有名なお話がありますね。で、この手紙が出てきた一九二一年も辛酉の年なんです、この年は聖徳太子の二三〇〇回の大遠忌の年なんです。だから、聖徳太子の縁のあるお寺ではかなり盛大な法要をやったようです。

姫路の近くに斑鳩寺というのがありまして、これは聖徳太子ゆかりのお寺ですけれども、先日、そこに行ったら、一九二一年にその寺でやった大法要の写真がありまして、見てきました。町を挙げて大変なことをやってみたいなんです、それは一三〇〇回と言ったら記念すべき時ですよ。同じ年なんですよ。聖徳太子の二三〇〇回忌の時に、しかも聖徳太子が親鸞聖人を導いたという、そういう内容の手紙が恵信尼の手紙が西本願寺の宝庫で偶然ですけれども、見つかった。大発見ですよ。それで、わからなかった親鸞聖人の比叡山下山の理由とか、その辺の経緯とか非常に詳しくわかるようになったんです。おそらく真宗の歴史に残る大発見なんだろうと思います。私はああいうところにも不思議なはたらきをつけているものを感じています。

これも広い意味で言うならば縁起なのかもしれません。

おわりに

そういう意味で、私はいろんな縁起、因果というものがこの世界の中に働いていて、特に我々にとって大事なのは如来廻向という、この真実の恵みの因果。これが聖道門では説かれなかった。お釈迦様は確かに説かれてませんね。如来の因果を。あくまで人間の側、衆生の側から出発していく因果です。この浄土の因果が私が優れていると思うのは、浄土の側、如来の側を出発点にしますから、次の段階として「還相廻向」というのが出てきますね。如来廻向が浄土の如来からこの世界へと向けられるという方向のもので、それを知ったとき、同じ方向として還相廻向が出てきます。浄土の側からまたこの世界にです。これは聖道門の因果の側からは出てこないんです。方向が逆で、あくまでこの世界が出発点であって、そこから修行して彼岸に達するといふものですから、帰ってきません。ですから、お釈迦様でさえ、自分は過去幾世もずっと迷ってきたんだということを原始仏典の中ではつきり言われていますね。たぶん私なんかから思うと、お釈迦様というのは本当は還相廻向の人だったんじゃないかと思うんですが、でもお釈迦様自身は、過去幾世にも涉って迷ってきたと。あの世界、この世界、あの世、この世、と経巡るのは苦しいことだということが、原始仏典の中にはつきり書かれています。これは聖道門の因果だとそうなんです。現在の我々の苦があるということは、それが果ですから、過去なんらかの「因」が

あるわけですね。過去の三世の因果でそれを考えるならば、現在の我々に苦しみ、迷いがあるならば、当然過去にも「因」として苦しみや迷いがあるはずなんです。そうすると、お釈迦様も自ら自分が苦の中にあると感じられた時には、自分は浄土教でも言うように、世々生々迷ってきた人間なんだと言わざるを得なかつたんだと思います。ただ私が思いますのは、それはまた本当はお釈迦様は「還相廻向」ということはご存じだつたんだけれども、みんな同じく衆生として出発していつて、自分も一人の凡夫として出発していつて、その凡夫でもちゃんと修行すれば悟りに至るんだよということを言いたいがために、ああいう言い方をされたんじゃないかなと私は思うんです。本当はお釈迦様は、今私が言っている浄土の因果とか、如来廻向の因果とかご存じだつたんじゃないか。自分自身が還相の如来、還相の菩薩だという意識はあつたんじゃないかと思うんですけれども、あえてそれを言わずに、自分の知ってる因果の半面として、あくまでも人間の側から出発していく因果というものを説かれたのではないかなと思います。これはこれで一つの慈悲の現れなんじゃないかなという気はするんです。みんな等しく凡夫から出発して。一人の衆生として。過去どれだけ迷っていても、もう一遍、一からここでやり直していつて、ちゃんと悟りに至ることができると。ただしそれは自分なりに修行をした場合である、ということだつたんじゃないかなという気がするんです。その説かれなかつた如来廻向の因果というものが改めて、法然上人、親鸞聖人の、いわば比叡山での挫折によって、新たに浄土の因果として説き直されて、今我々に恵まれている。ですから、現在我々があるのはやはり昔からよく言うように、釈迦弥陀二尊のお恵みの働きだというのは本当にそうだと思います。浄土門という



のはそういう宗教ではないかと思っております。そういうことをいろいろ本の中に書いてきましたし、またこれからも語っていかうと思っております。

どうも今日はご静聴、ありがとうございました。